

台風15号の被害を聞いて考えた

台風15号で被害を受けた千葉県成田市の小泉輝夫さんと連絡を取った。台風が来るので目一杯稲刈りをして乾燥機に張り込んだものの、停電が続く気が揉まされた。幸いにも、停電になる前はかなり乾燥が進んでいたようだ。SMSで彼の窮状を知った仲間が大型のジェネレータを届けてくれて仕上げの乾燥もでき、張り込んだ籾はなんとか売り物になりそうだという。

しかし、乾燥舎の外壁が飛ばされ、今年新設したビニールハウスの格納庫も潰されてしまった。まだ把握できていない被害もありそうだが、水稲はなんとかかなりそうだが、大豆は全て泥水がかかってしまい全滅。トウモロコシも収穫

はできそうにない。

2014年に、「君のような中山間地の水田でもトウモロコシ生産が可能だ」というのを実証してもらいた

「のだと文字通り筆者にそそのかされて始めた谷地田の水田でのトウモロコシ生産である。圃場の排水を改善するために何度も暗渠を入れ替え、コンバインが通れるようにと自力で農道の拡幅までして始めたトウ

モロコシだ。子実トウモロコシ対応のコンバインも導入した。それで全滅の今年。電話をする前におおよその被害の状況は彼を訪ねた人から聞いていたのだが、実際に本人から被害の状況を聞くとかけるべき言葉がうまく出てこない。小泉さんに限らず、今年のトウモロコシ生産はこれまでにない被害を被っている。

15年に現地研究会を予定していた茨城県境町の塚原牧場(塚原昇さん)の水害と言い、今年の小泉さんと言い、なんでトウモロコシに取り組む仲間が災害を受けるのだ。未来を見つめればこそ、補助金目当てではなく、行政の支援も受けなくてチャレンジする経営実験。投資もばかにならない。まだ利益など見込める段階ではない。それでもあきらめない彼ら。でも、小泉さんの今の姿を後継者はきつと見ているはずだ。幸運の中にいる彼ではなく、困難を親ほどのように乗り越えていくかをこそ子供は見ているはずだ。彼は電話の先で笑って言ってくれた。

彼らの水田での子実トウモロコシ生産へのチャレンジは、間違いなく未来の日本農業の可能性を切り開くものだ。文字通り自ラリスクを背負

って行なう彼らの経営実験にこそ政策的な支援が必要なのではないだろうか。

日本各地を襲う自然災害はかつてよりその頻度を増し、しかも苛烈になつていくように思える。台風、地震、火山の噴火、集中豪雨、津波、そして自然災害とは言えないが原発事故とそれに伴う風評被害。さらに昨年の北海道胆振東部地震や今年の台風15号での広域で長期間にわたる停電、断水など。我々の便利な日常生活を保証するインフラを麻痺させ、二次災害に見舞われる。30年以内には大地震が起きるといふ予想も含めて、こうした変化にもかかわらずそれに對する人々の認識だけでなく国家的な備えも不十分というべきではないだろうか。

コメの緊急輸入という事態も招いた93年の大冷害から26年しか経っていないが、新品種の開発や農業技術の向上によって冷害常襲地域でも被害はほとんどなくなった。技術で克服できるものもある。人間の力では如何ともしがたい自然の猛威は避けられない。しかもこれまでの常識を超えた災害が発生するだろう。農業を取り巻く情勢は大きく変化しているのと同様に、人も政策も過去の結果の現在にしがみついているだけではだめなのだ。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。